たうけうしてものうけけらまきろとやをもえ
すけあさうもとくやまて
こそもみるくしかるまに我君はすみちなもせうまさせ
かう二位の大れとのくさうひのくくともさみし
かうとそすけいきうけあきうもとにいひやまたまに
すけいきかかものくるものおふせよ姫君まて
ものさをたうにくくとくいさえ業房とあるかや
二條殿うせられてあるまきうかうし
美あるそまてもあるへきえんあるは祈まぬをもかけうまて

果田右大臣

重之集上

佐理

三位の大郎は故小野宮の大殿の御子也ふより

實頼

殿とかとをのくうるを宰相をうへたてまつりまて
大郎よりまてはかりをはへると道風をもちていと
うしてをさをかをはなくてをなをとはけうくそ
むこをはけうをけるかかの御をなをはををふ
うるをかくへをを詠もよみそえんとのをくはあうう
しをを若のも事あはかてをるはををくくも世中
くうをあをとうををもはをくをまるをやあん
大郎のかくてをををくくるをあをくあるのの

おうこさかともあるへし

松うえにすみそめ手ゆゑ立てうつる色ハ雲井なりける深

かまと山

雲ハなほ松にうるかかまと山嵐も雪もうつるとやうつる

そこさこさの雲ハ雲井ゆゑ

いくとしかかさねきぬらん雲乃子孫

いさ乃雲原

松へといさ様ハいさうつる雲ゆゑ年にあるんとそ

志のしま

みとやくさ様ハまにといそけるもかたまてに波そうちる

秋雲ハ志すさ様ハまくもをのうまとやおもいつん

そ兎川

深川の様ハせうる白波さうたうふうそあるる

うさ

ほうてと梅くるおいそうくんうるゆ様ハうる

ちうれしま

名をうのかちう様ハまとこうまうあちに雲ゆへうる

白雲ハうまる雪とみうるせのちう様ハのあるゆ様へし

みのしま

村雨ハかるく衣のあやかさに様ハのるまれ名とやうまし

あまくもの
あまぎれたるこのみゆる我身をいとおもふ人もなき

秋

もゝせする秋を旅にそなれぬへし我ゐる人もたけあり

一本菊を見あけよ植て大和後乃作ことそ

をくるにはまをせつみ菊花をおもおまはりふるぶ

四條の后はさうし絵ふとある女のけさう又うけ

をなさちらもみるまい

秋あまたなるもそなにる人の心ふかやをくらん

小野物乃所

かうふるかるゆも今ハ物おもへ秋乃色のうつりかけ色ハ

女房男方ゝてお歌あそする所あるたゝ心ゝ

かゝはのすゝはなるハゆゝ

あるやいろもみぢゝ白菊のすゝゝ見ぬまゝ

ゝしせさゝゝ女ゝ

誰ゆゝ物ひ入ゆ山ちとそうゝこゝふいそまゝるん

女ゝてゝハせてゆゝみをゆゝやゝゝてゝ物せてるに

かつゝゝゝや久ゝ菊ちゝ風ゝゝ色ゝゝ神の色人ゝゝ

山のゝに霧とすゝる世ゝゝせゝゝゝ色とゝすゝゝゝ

秋歌

みちをはなれこひそうてゆる道おの吹風ふきたけてあまめ
ひろうさてはるのもうひろいふさめて波のうちん
みち紫をとのうはもみたぶみるふいさむる人ふけと
初雁のをるぬふこさみちはのさかとのなきよみを
八月十五夜庚申ちんまて大郎のみちちてされ
ことふかりはひあるこのみていさされるふ
ことはくふさつ神るかう合はのうあくやうしさぶ
又むしこの道いのく
みちやあを盛はすむ原ふをの道ふさや秋をふ風
むさはためかるかう夜とうて二年あるて

うふかさひかるひかう夜くさとまてやひるうれ
みちのふはあちふあるくは九月ふひやる
こひやるはむ雲をあちはにゆみちをぬん
ある人ふちに蓋はやうまてやみるとゆを人日
をすかとかくはうめ道るをうせ拾を道八
物ひてはうさうの八人をぬんのうちはる道あるを
みちのふの柳のの家はてはみてふのちかとて
七月七夕乃はんん
たはとてはひやを七夕はけゆく元のあまるをふ
うみたかてかみをちを深

吹風に色そめやらぬ浪はたゝしらぬ花とよそてあるらむ
廣沢の池よりいつる波の立をたゝ花かとして
廣沢の池よりいつる白雲はそこ吹風の波よりそあらける
あま紅にやとかりたるに月くもりまれ駒山みえ旅は
波まよりよふかく出し駒山閑とるそこよのなそこそ打むかへ
うこ乃あらしの嶺小みちのくまよる
まつ迄ていふ小恋しとおもふんなるのかゆそ人をまちなる
あしろ木のみちよせくる
わみち紫をよするあしろはおほくまて秋をとゝめてみるよのそかなさ
流るく人ゆく月

天の原波のかみもとくに舟はやこゝろに月のなとこそ打まち人
山たかみおちくる瀧の白糸はあやにくによりてそみたれそめける
やま吹の八重咲花をかゝりしみそよや一重にまさりけるかな
又立春
山川の氷とけ流し春のまへはぬるき風よりもさやかさすまなりなき
青柳の糸よりかくる春のまへは池の水にもおもひよりくる
けさはまたかれにあしてそめし物ますへしとせめしつまへは
あつけ二見の浦乃中におつる月かとみまへはかりみなりなき
いつそや幾さみの浦はあとにいとしゆをいまてそはましねを
わかれやうなまて年あつめて定まるへしとて

えこ[illegible]ちて[illegible]ものあるふ川ハ川瀬のみそぎなとみるあ
かゝ[illegible]ゆつのうみかたるあの神ひ[illegible]川神ようたなむ
又大宮の作ことよめるとおなしかたまてまつ
いかりといそくたはさしたちて[illegible]乃原をうつてゆるうれ
忘のめ[illegible]の原を誠[illegible]ふまてよるまるたちてすま
二村山
秋風をうちとる[illegible]たか神ふうる二むら山
[illegible]
年をへて[illegible]さ[illegible]ふ[illegible]ゆ[illegible]ふまてあるる
人のあるとき[illegible]人の[illegible]橋をみて

さうらとあくさうる橋おちたる人もおりまん
といふるをもつてしる
つまくとおかさもとにたうあてとかれ芸ふんをそや新
むはまさ人のあれおりとふにて神むて
ふとい深てたてく来好まとて世ものてそちなりかあ
をろなりさよるる
人うる我衣[illegible]ぬハ一東の家やいふをうてそ
むくあふことをいしく人よそ
みそうはひよあひみ次来をて名姫のよさて人よ吹くん
むまのすけをて播磨よりるにはの浦をそよる

くるきふかるかさておさのこふ出ぬ
白波の羽おりうえ濱千鳥かすかきあさりはいこえ
あひのふもしくちる柏木はひろはまきる夜ふこふろり
村雨にたちうくまさせ柏木の青葉をかいはあれまるかろ
ゆううはなはよこしのはあを枝ふ波のようすると
たつ波のようる糸ををかすけて風ふくうこと川の松
はくうとて女はあひて暁をよいひやる
かふのはけふまつふ我をまや波ハうぬ物をあうる
又こちのはよてあるをくの青のとこひよやる
をはれ波の物をるふかををまるおとるいひをかはれをのをを

むまこのようをを京へいくを暇るをかくりて
はやのおとおとをまうふこひてま我をはふあぬをを
あをこはやをるとこをていひやる
三河うみのあをはやをる元ゆへふるるををとたまををるを
む祢たうみちのはまををるをる三人のかうあり出るる
まをはあった
松為はは枝をむまあるあをはををまくみをうを世うを
東乃松はたを月はけ人の母車にて出るるはかを出はを
すけるるみをといひるう
東はをはうる我ををて波乃みをるをこをうを祢をて

なしあまたびつけのまゝとかく波をのかす神とたのまるゝ人もなし
あるへあはれみけるくにはなれて流れて
をくらき春の夜のうちにありけるにあはれみ流れゆくとも
くるし
かゝるよはしほのみちぬかはゝをみつゝやいとゝなみだはゆるすな
春雨をよみける
ちる花をおしむ涙の春雨にぬれまさる人こそ世にはなかりけれ
春雨ふるに梅のあしたにちるをやまぬ人のゝ涙はなをそちりまさりける
くれの春
春ことにながるゝ川を花とみてをられぬ水に袖やぬれなん

年ごとに春とはいへど桜花さきてうつろふ色の身なれば
くる春とは思へど春の中のにて志川ん(を)なくとものとてこそなけ
ゆく花は我が身に春はうつりても花ぞ又くらしさ
春ことにとまらぬ春とは思へど花(を)ゆくへは知らずまうくなる
二月ばかりに梅の花に雪のふりかゝりたるを世の人のみて
おもふことありて
花ゆゑに散る雪は我なくはいかにまつ春はいのちならまし
かくみよしのやまかくれ(ん)
雪さえぬ我身やまかげの朽木には春もまたまだぬるむ枕にてもすむ
ちる春は白雪ふる

初瀬はつせ　ひさうの山にあやまちするやけさのゆきの
まさきかづら　枝ふうつまは白雪をおもふ　こそ　はるさめ

立春　旧又　雪のうち

雪こそ　花のみえぬ　せうの　ぬきもはやぬきもまつる
山里は　すみあるまそ　雪ぬへ　雪ぬの　花よこゆ　雪
吟風を　ふるふ　ふりて　梅ぬ　ひとり　ふるへ　ふる
風ふむ　雲や　雪ぬ　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
雪とみて　花ぬ　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
女の家　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

當　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
雪夏　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
山　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
白波の　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
若　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
けすふ　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
おく　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
雪こそ　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

かぐやの姫の昇天

かぐやの姫の昇天

かぐやの姫の昇天

かぐやの姫の昇天

大寿舎のゆきすさのうちに昔の涙を新まして
紅日さしぬる武蔵浦にたのもしかるべき世なりけり
雄波まそ鏡せうそうして春の夜のあけぬるとおもへて
やうやうさして金屋にいりぬるとて
おく山にかすかにかけし夜波にまさりみゆるものまそあるかな
秋はもつまつ人
年こそは若ハさくらゆけとうかし秋ハ又ふかるる
やうう和ハなりぬ
いづこにかふるさとまつ花ぞ匂ハすみうるるを察
吹風梅の香ハ

花さうぬ我宿ハ人もふはひるるこかりて物と見やうりん
梅の枝のもとにおきてに散ぬと知るもいとゝ哀なる
家代乃春をうそうる宮ハ花と行にすめハなりけ雪
散雪を花とおもひとみる人さハ春ハ心の波さるる人し
消なそ雪ともみゆる心梅よりかくうせいいそ春まし
花にのみうつりまして行る宮ハ春さそ花ハ春ハ
散花をおもしるかく宮ハ春ハ春ハ春ハ
世中ハおとろくゆけと梅花色も若ハ枝ハ春ハ
山里ハ梅花そあるさかあすむ人さやを川ハなるさ
宮ハ春ハ春ハ春ハ春ハ春ハ春ハ

春はなほ雪のうちなれど花の色はかをるこころぢぬべし

いそのかみふるのやしろの春の雨にぬれてぞ色はまさりける

うつろふ色はかをるばかりにあらぬ花ぞ春のなごりなりける

うちそのひかりとうんもやさんうさ世中の花はさらすや

をとこもせれば谷のうぐひすなくなる山路はたれにかたるべき

我のみやゆきかへりまし山さくらの花のうしろみとなりぬべし

初春はいとうまれかさを時なる春にはうまれかさをうめさ

いそのかみふるの春をうぐひすのなくこえにうめさん春にはうまれかさ

丁度のくるはるのやまのうぐひすのなくこえにうめさ

山里はうき世をあはれとおもひいでてなほ春をまちかねぬ

あふぐまにうき世をひかりうぐひすの衣袖のうちにあはれあけぬる

又春のひかりにあはれあけぬる

春すさいとうあをそのうへにさかせたるあはれうぐひすのなく

波乃あをにあをさしるとふ歌をためさよとむすびちら

さるはよまれてあはれなることなるは

ためさよ

春ふかき春のあをさをみるべしふ波のあをそたちのまあるを

む祢ちら

浦ちかみめるとすまは白波のよるとそ社春をあふらん

こまをとりてとりそへおこるか
ゑのさい蓑てのみをそなるさもまつてさハ波ぬきうそをなる
ちりうみの波乃ほりくゝ立波いとまなくて立つちよるらん
枝もなくうくゝよ咲梅花風よやまるなうそをみる
花乃あくまをなるものをみて
あちふハ散ちやはなゑくてりまをうそをするうれ
嵐の志ひなるさ春ちよハさてハよとひ人を恋てさ
知いてくらふいくうそ枝ひなるをやく人ハうそくをらん
大嘗会すきの乃ふうち出くそ乃里影よそ
くゝ乃ぬ里の紅ゆゑひのけて見ちやゝ世ぬ春ぬ

ゆきぬけるをゑたゝ川を頼そ
紅ゝ川て美代て波月乃ぬまを底もみえる玉ぬたゝ川
又屏風乃絵ふ
我ぬ乃ぬ昭人乃ぬ乃ぬ生ふう乃ぬ乃ぬ
ゑを後乃いを井に安乃ふ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
ぬを乃ぬてすあるいつをて
若ぬ川の雲ぬ長ぬ乃ぬ乃ぬ
若ぬ雲ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
志ぬの乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
こまたらぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

出るいはくみかゝまる白いとハ巣る人たゝぬ物ゝそあるを
やうそむまやをゝくるゝ物ゝ日あるまゝとおもふ
をかみ川おちをふ滝の白いとハ心のまゆゝちるゝゝそあるゝ
はをみ川ハみゝさゝ所ゝ物ゝ沈物ゝ
あまをハすきゝゝ
をみ川滝のゝ糸ゝるゝ人のゝ
おゝそゝひあつ免ゝ
若狭の後石ゝ
よゝまゝのゝ
お坂の宮とハゝゝゝ

法師のゝゝゝのむをゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
二月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝハいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝよゝゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝとハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みちのくのおとこも男女かうぬちし
嵯こうしまるとうまもさびうしけこまとあまハ
人くうしけとうてとうみうせたのゆえ
いうまあまるる年代みゆるる小松の原にうやるん
久しく
いうくをたてあるるあるハ元うハる代もおハさまし
又歌
元かことに世ゆうてまるる鶴代の巻小松の巻
仁和帝乃子日
第代を巻を巻ふ代子日ハ殿人の小松をかけ元まる

をこに竹田子代浦をとるに浪ちハ
風吹おれもうゆ田子代浦のこゆみをこそさるるかな
をのうるこ代ハ田舎ハ田舎ハあまハ
人の世ハ巻ふ巻とをうぬまハ巻代ふ代ろをうん
こうしめうしこ世ゆうてとて
一人の浦かこひまるる浦ることのいくへとうまうせうん
世中ハ巻ハ巻代ふ巻
紅ゆ巻こ巻と衣ゆ巻と我身をいろやうえん
世中代ふ巻ことみてむ孫ちふ巻日
御代世ハたえ浦うまくあるる巻代ふ世代ふ巻ことみるやいけ

入道

雲井ちかう聞まさるる滝川の音をみえつる代をうる哉

神主の円仏ふかくたのもしうのあはれなる

恵のおこさる

大方はなをさそひ時雨おりふしのあとをあらしん

有相寺より法の華合するふおなじの事あるそう

とさてひはれたる

よるやうるをえの波やはるん物ありみのはるる雨こ

俊寛はなをおしたりぬるとそうあをそおりく

はるみまして

こゆるきはの松のもとめしぬみは濃はなをみは誰よりすん

くるくるくるひとりいるくいりをおこたけてえさせる

見川の山はてもみゆるこれひえるくいのおりさま

おりふしにあひやおりたりんまゆみいむしそをる

まちくるうてうて

くるもあるはやこのまはなをふの花を思う

といくはなのふ花

我こそはあるみとうそこと思はれるおこさそそ

いまはあまはて来てひおこ波

山姫の我はいりていめ月見ひ出るはあそさなりそ

えし

ゑひ出るなにはの海にて山ハ畑かうしーやハ

あるやんとおさまるまて風まつ今ゆて

するにうさ和とへのいみてまのくるさ時ハ

をおこせてうえ作て

よくーやるみちおそうるかれ物とくるそみ重

無盛するかれうまるを時其出ゆうる男れ

清見ん寺といふてまるくまうけてこ乃めの

もとにいうてうけまいかくあんあるとかみはかうう

けまハ

するかのうみ無盛

するかの清みう寺に入すんて行ふことハかうくうめ川

如はうそうて

せうすんぬえこ公のうよひるの舟をうめてうひやふうん

重之集中

大武の山ちかのうりにけり

永徳元年九月十五日　こそ美八みえなき

大武岳は高よませりけるみの滝と

吉にさくつみの滝とうちみまたたく山河ぬるるそをける

たきなの滝ハこまゆまさりてよむ人ハあり〳〵さまと

たるまやハとそ

心河ハ物うら〳〵如えたあまたそつみの滝よあらもまくくめ

すらや河ハ去

去人まゆまりそうちみるとめつ〳〵けかさ山面をまとも

か河の水を

やうたもなかなかえ去月水をたく去相にほうせたりあ

あるやんとをさかはむう

去ハ月にはのりるこそまさうける山ぬるもの小尖ようう

夏

我をにほりあさたく八元郷ちむあ山を称をあさうたぶ

ためちうたまめうにさそみ〳〵かりけるこうと

こせ次朱にうと恨て言のよそうるまをもすまてうん

いそかはむあまれ分やあるものと去の赤ちに後まそそあ

みちの国乃をさう称ちうあるくの物やよ後まうると

ひはおとせてこゑのうちとけていまこゑ
おこすあらし
はころみ〳〵えだと雲井にのぼりたち失えたるたのむへらるる紙
入る雲はあひて
嵐もろふかのそこにのりふかとに雲やいぬらん
又雲はうさめとひやうて
雲ことにはすまぬ山ろ堀はかのみやこにひこそやまま
あるやんことおさ所めせいまいうたりむうまは
かりひてたまへは出そまふかとなく出後一ゑ
へさるまはけて岸ゑ

天原ゆるる色はたゆみさをはもみえ入るる紅
ある女は秋
虫は秋のあはさ聖人の恋すさたちゆひらなん
八月くらにさまうはけきまうはのうの絵やうの
蝉のうぬけとつゝみてきえ入るさ〳〵れをゑ
うせぬうちはかはゝとみさぬをとり〳〵せの
夏ころいさこしくこそうるみそ〳〵をを
くりていひやる
いう〳〵の夏こゑ小夏は蝉のそまゑをとるみそをる
みちのはれをこゑ母ゑをひくゝゑ

さかりなれいとすちかへあるぬ衣ぬのうへにのりたるものの
又はそれもとりそへてかりあちたるうこんをまて
うくをは
はるかぜのくるそはるくひとせと命にあるへしあるへし
新三位女御うちにはやせむ〜あるたちとさのあ
さい兼香殿女御の書たちとまとろか紙をいとへ
いとえらの物〜くわうむこの元さちもへなれいひ
うけとといひてまいりいんとをふとて神さう
かたしら誰ととへいみかもとれるへ侍るさ
かのゝ侍といふ

こゆるされいそのかのうそかのゝ神とそなかうとそはるさう
女さまはよとといひてさうもそなぬる
いそかはもあまかはそはるかみの屋のものめくもゆるさ
といひそそうへはるる又波立をとて
嵐はいるもちまうる義波は岩かはやうはあるうん
表仁のうとやひるるはあるまうん
いまへをはて後の表面はうの被はそはてさて山をはく
をうもに部へゆんといひ紙うて物と記うはあるふ
よみそやる
行表に立後はめと表嘉をあぬをかけさはるうすか

法師のこゝろのむすぼれをとゝのへすまい
はゞやそのよハたけるんをめくるといてせしやや

又法師

りさまをとゝふ波の志ろ人そ蓮れ池をこのむ志ろそ
まる

波をのみ袖にかけるそ物しらハとひ出そそうろひのあく
いろ人の高さ人も身をぬよハ波れゆりにあひみつるか
桃花すけるくのうちをいてあるとみて
人志ほすとふけと桃のくるを色に出てハゝそみる
大武の浦をな

きこゝに牧さ人雲れ紫ををけみ志をたのむ者にゆゝそ
たけくまの松ゝすとうまをハるる
たけくまれ雲も一すとうまにゆうせにてくあはされ
志をくてなをとまりとうたけくまはとさはふのこハいそるのほん
かりはやうはやとるをそをもをいまをくの
ふハふひやあるとるん
りゝにををくやとるまをむうまれハはをくくを
岩もおうくん雲ふたるを志あやとそんを深ゆる雲
おくををいひやるくのあをくるをハ
岩はをのをうひまるこ袖ハをりひをるを志乃雲を

そ称のようたくたまそていけの家そかのうそと
ふるものをよそんといへハ
ちとやめる川の家代神のこまりそんかのうそよたうそ言そ出る
暁のまうきにみやる船白いかのうそせまし我よりそうそ
あれ右大臣家よりかいふゆみそくてをうとて
みちの物くはあくちのまゆこ初やとそ家よ我家をまうせけるに
あれこちれ出のうそせきめそ船そて宮うそ返し
うふよりみてまうそ
こそ侍せこふとまうとうませこと〻ハ歌ものとけうまし
へし

歌をよハゆうそせまし白川の西の家ハこそせこうよとよ歌
平貞の家ふまるもてはそくるに一尺ばかり船そう
ふ代のこうまる白地こそまそ
とうひこめうふ
と神のいふおこうる
二条ある平貞の船をうふこまハ
そこうれいそまして京よのうる
白川の四ようちハのとけくて今そこのいそうる船
こちのくはよそ子のうくまうるに
見うためと物ひをさうん墨染ハを物の衣の色よそあるを
うる

ことばをしつひとくるのもとかりうるとをのふるまひは祖をはなれ
かよ行のをとかは世ををさめて物のひろるに
さもこそ人はおとるわまきあるものゝ心にはうゑまある
かけきこゆいひても今はいふひかたにたちの上はむとうるまき
むすめは男もとるといふこゝろ
世にはまはかはあくまきて君をとよそとこそさけ
ひて
人をまぬうはみまさの的かまやうにあるとをそふ
あ川まへうるかは小夫濃はときの那よて
旅人のをとりうるかは祖雪俗とうのこゝろなるを深

東路のうをうるまとはもうるへのあまはなりを深
夏の夜のみをとくるをとくいふあをはあるよ
あるへ人をまはかは
夏はのみをうるつもりあすあやふはのをんとありへか
秋の夜月をうをとて厂ふをうる
月影をまつ人里もある物をかう秋風のかるをうこゆる
たちをうのおさをとのをけゆをさはるうは日を
行てをのをみてたてまつんとをはかをんと作
らまをまはを去世はを夏世はを秋世はを恋十雜十
去　二十

ゝれぬ事なれば書いけがしてけさうをみのさちうくるん
雑海えは出るあれ松をみまハ松をあるそこひやくる
みそハいふぬむすくる流のいとあまやうに秋風よこくるとこする
めつらしくくるれも鴨のむまるハ池のおやうすくるん
去日肥ふむまる川雑の羽をとハ吾れ清まこ笑ふつめくや
まくこちてをとへぬもまくうきれ山ハ春ふうはるまるう
有盤なる家の松茶まくくも春たるまハいそまて
くるこけハ新日は蛙もすくくこ苗代をと徒まうすん
春れ日のくくめくも出てみくるふとくあまふくを
也ふれこまを也て八月梅花ありて秋くうくもくうこ

いつまをうるもくうこ去くちて散こ梅花ありふ春に行う
常れをの羽風は散花をのくけくくたのみくるふ
ぬくくを去くもくふくをひくる花をまちにみゆるくくを
常れふるおをのこたつぬまハ去花常花のこをみる
我宿や花おくうに秋ぬん人ハ人のくちをまるれ
青柳の糸をみをに流くる去風やあみハふすん
花さくくつをまる庭小風ふけハ糸もくふ波をちける
みをえをぬの風心吹うけこまハいろれふくもまくうくる
夏ふて咲ゝくくを蓮花松をのこもみりひくる
去れハゆきくをゆまをハ蛙ふ
るくをふのまくうに酌をくあて

夏　二十

花はいろもなく被物も薄くなりぬるに
夏草はいとゞしげくなりまさるに
かけてこゝかしこにひとさけ咲たる
卯花はさらぬ顔やうにて秋をまつ
心地のするにはくさをかりはらひ
初めのさゝまりさゝ附るあるかうくさまつる
夏かりは秋の古枝もたゝまるはかりなる
ものまさりて山田はなくはかりとよみ
我身ひとつにせきもあ自然ほのぬるとみるなん

月はいるかうくいとのあるひよりをやあるらん
夏はあるものもみゝ蟬をまつ秋はせゝあるとさてゝ
旅人のたく火をみる屋をつゆもさゝあるかうあり紅
ゆゑもなくて夏はへぬるもせつゝあるふき風のいまはあらき
草はかるゝこゝろを夏はてる日はもゝ中はかぜ吹
元禄のむかしはかをもせぬなまにはちとゝひて城まし
小男鹿のうゝまを夏草もおけるかとはかはさるん
夏はの花をもはけ見るまを今はかはよ秋をきるゝ
秋風はかぜをこゝにかをりてをかりにみゆる夏の花
ゆきるまを花はけきにるを草はあり月をさゝかけうるとゝ

秋二十

秋きて夜ごとに人のまちあはせるゆく
天川あまつ雲ゐの月かげ
七夕はまだ日より秋風のよこぐもさむくなりまさるかな
をりをりにとひもゆる蛍こそ
待人のうけみえて秋山の月のかげりて神り入ぬる
秋風に若ぬ人よあく初るもひはあくまでとそ思ふ
おもひかねこゆる山への遠ぬまは白雲ばかりやとりとそなる
萩の葉に吹秋風をよまつ
秋風の吹ぬ賀さかあるものをとよひいくへとそひくさ

なく虫のあるさかりの小秋きぬ
秋のよ待の月よ初るこゑ
牧風に旅の夜ねんせこうろをとひんやを
白雲ばかりて猶ものかりる風はむへもふさろ
かうこのやとをはなれぬるかりやそいくせん
秋風に吹みちなまは雁波江の芦ねうそ初うふ
白雲はあるの山ねの秋のさうそうちける
風さむみやこまは紅すさまもとにはねくゆふくま
白雲はさかる葉とおりつまは袖ぬまそいろまさる
山城乃石の羽根ゆうとおるて猶紫風ありひこそやま

冬二十

もみぢ葉はあつまる枝になく霜は志ろきをとうもなやハ

あさちふにけさ吹風ハさむくまさりし人を今ハ河袖

さむしろハよるハさそ袂よ深山より今ハ木葉もありしならさる

冬なる雑は小夜く霜はむさきとハ誰よ我まてかけつくらるらん

ちるや鳴るをみのかさせる日影よりとけすて霜はなるむすふ

霜はすまけさふる雪はさむきまてハ人をうさ掛てつらしとそ知る

若葉にはくまて行くよる宿はやもあらぬ冬ハこうよなる

我宿ハ今降雪は消さしハいかしら恵とまつれまやハ

降雪にぬまてさそさぬ我袖をこなかれも明しけるかな

冬くまてハつくしにみゆる山ハ雪ハくなむとしてなんな

なにのうき桜の花しぬるくまてハ梅もあらみえとあけける

志なれるあさましの山の中にさハ雪こそさくまてやハりなん

たく今もありとて鳴の山雪の中よりくるてとて

冬くまてハあまねく小雪ハかひくる志らぬ河浦ハにやさるらし

あふみなるやひの入江よさなあみの舟をいさをとけさそみえつる

志なれるいかにハあんなひをよ降つむ雪はとくるかくまて

殺志なつくときけともうみのあまねく志きさハさむけ也冬まて

年をへて雪ふりつむ白山はつもる雲やいつこなるらん

山のさとをまそとみかハ白雪ハ降りぬる人のみゆきにさなる

君はるをのこをいたづらにとはあまをとめをいとはしさ

恋十

恋をのみあうてすぐす夢やゆめ覚めても神はさらぬ

こひやる我袖の上は雄波女の芦ゆ〻紫のうすくこそあさ

風をいたみ岩打波のそのゆゑに砕けてものを思ふころかな

うらとうる世をそなげくゆゑ人をはゆめかはあはぬまそあさ

松浦のとまは波はあらせあまは袖そかくはぬまつ

よさはつとみまくさかりにもあらぬ人をはたゆふるものは

その夜やゆめやまと波くやけ橋のたゆめは我はまつ

波くらぶやまはけ山はけ色に入はさつさつ紫

とおもふ川をとりて川をとりて回をとりはたけつよう恋のみ

ちる

恋波のまさきはまはあまをそ常に袖とろむ恋

雑十

るかはたの雲はまあつはそのみはたてさてます

あはよりきてるあさと吹風のうもに我さ波やおもふ

うしとおもふなけさはうまとたそう恋時はむ

みさをあるあ〻波そさふくはやく焼ふ

衣川みなまは人のさうまは被はそあみはよせうれ

ささうや波はたちてみはせはつふとふくやさゆく

磯はそおもはみちくまとを浦ごろも波のゆそうもあへさ

たけくまなくおとしたる松ふる我ことむとうあつとやハみる
あとにいのみなるるほのぶるきハ（さきく）なりなのまきとあうれ

いと丹

きこと〻ばひそりるとやそたまは雲の紫枝ハ天ゝきるん
やそたまの松の紫枝を吹くへて今ゆくすゑのかとハきるん
枝とうぬきよあくも埋木ハとそんまとて年色あるか

右四部以一本校合了

一本堂藏書

国立公文書館
National Archives of Japan